慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 近代化と「読み」の変遷 : 読書を通じた自己形成の問題 |
| Sub Title | Modernization and transition of reading : discussion of character building through reading |
| Author | 山梨, あや(Yamanashi, Aya) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2001 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.52 (2001. ) ,p.71- 84 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000052-0071 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 近代化と「読み」の変遷
## ——読書を通じた自己形成の問題——

# Modernization and Transition of Reading
## ——Discussion of Character Building through Reading——

山　梨　あ　や*
*Aya Yamanashi*

After the Meiji Restoration, the technical innovation of printing made it possible that not only educated people but also people of various classes shared the opportunity to access "reading activity". The prevalence of newspapers and magazines and general improvement of literacy contributed to form a habit of reading among people. In the process, the form of reading shifted from "reading by means of a teller" to "reading individually". Moreover, books came to serve as a guide to one's character building or orientation of life. Whereas, reader's classes were divided according to what they read, which can be considered as one of the causes of ideological separation between readers, which were to happen later.

In this article, by analyzing reading activities and their history, it is suggested that we understand how reading affected character building and forming ideas.

## はじめに

明治維新以降，西欧の学問，思想，科学技術などが輸入され，日本の近代化が進行した。教育もその例外ではなく，教育制度のみならず教育思想，学問内容においても西欧に依拠するところは大きかった。特に学問を通じた人格陶冶 (Bildung) という「教養」概念は，従来の儒学を基本とする漢学に基づく知識および人格形成に西欧の人格陶冶が接ぎ木される形で，近代日本における一つの思想とこれに基づく人間形成のあり方を生み出した。依然として階層差は根強かったものの，従来の身分制によって社会的地位の上昇が規定されるのではなく，「教育」を通じての社会的上昇の可能性が示されたこと，さらに自分の親や師から授けられた規範のみに依って自己形成するのではなく，新しく出会った価値観や思想を自らの生きる指針として親や自分の生まれた境遇とは全く異なる人生を歩む可能性や選択性が示されたことは，日本における人間形成の「近代化」を意味するといえよう。

それでは，親をはじめとする既存の規範とは異なる思想，価値観に人々はどのようにして出会い，自らの生きる指針としていったのであろうか。本稿では明治維新前後の人々が新たな思想や価値観に触れるきっかけとなったであろう「読む」行為に焦点をあて，この行為が近代化の過程でどのような変遷をとげたかをたどることで，自己形成における「読む」という行為の持つ意味を明らかにするための予備的考察としたい。

日本において「読む」という行為に注目し，読む対象だけでなく読者にも注目した研究は大正期に端を発している[1]。しかしながら，読むという行為の分析を通じて人々の思想形成やその伝達に注目した研究は，1946年に発足した思想の科学研究会を中心として本格化したと言えよう[2]。1952年発行のパンフレット『思想の科学趣旨と行動』において鶴見俊輔が掲げた目標は以下のようなものである。「ひとびとの哲学の探求/コミュニケーションの研究（日本の大衆がお互いの，心持をつたえあうのにどんな方法によっているかという問題)/私たちがもっとはっきり考えられるための，さまざまなこころみ」。「今まで日本のインテリの考えや言葉が日本の大衆から浮き上がっていたことを，私たちははずかしく思う。(中略) 私たちの方向はこれまでのように，大衆をマ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻修士課程
（日本教育史）

スとしてとらえるのではなく，大衆のひとりひとりに関心を持つことである。この関心を通して大衆からまなび，私たち自身の感覚・思索行動を高めて行きたいと願う。」と[3]。以上の記述から浮き彫りにされるのは，戦前の日本における思想を語ることばが一人歩きし，明晰な思考が出来ないまま人々がことばに取り込まれていった状況である。つまり戦前において思想は「ひとびと」のためのものではなく，ごく一部の階層，たとえば教養人，知識人と呼ばれたひとびと，「ことば」を共有するひとびとのためのものとしてしか存在していなかったのである。戦後「日本の大衆がお互いの心持をどのように伝えあっていたのか」という問題提起がなされる背景には，大衆のみならず大衆と教養人・知識人両者が全くのディスコミュニケーション状態にあったことを示すものである。換言すれば，両階層間をつなぐ「ことば」そのものが欠如しており，その原因の一つとしてひとびとがさまざまな情報，思想，価値観に接するための「読む」行為に関する分離が想定される。「読む」行為の分離やこの行為そのものからの疎外は，後にものの考え方，思想などにおける階層間の分離，断絶に発展したといえるからである。「読み」という行為を成立させている読みの形態，対象，人間の関係に焦点をあて，ひとびとの営みの中で「読み」という行為がどのように行われていたかを明らかにすることは，「読む」という行為が思想を含めた「自己」の形成に対して持つ意味を明らかにすることに寄与するだろう。本稿では明治維新以降の，音読から黙読への読みの形態変化に焦点をあて，「読む」行為が人々の間にどのように普及していったかを検討することで，読む行為から，それに従事する人々の階層，思想がどのように想定され得るのかを論じ，「読む」行為が思想の形成と階層間の思想の分離をどのように説明し得るものであるかを明確にすることを目的とする。

## 先行研究の検討

誰が，何をどのように読むのか，という「読み」に関わる問題を近代化の歴史的文脈の中に位置づけた研究として，前田愛の一連の著作が挙げられる[4]。前田は音読から黙読へと読みの形態が変化して行く過程に注目し，この形態の変化が書物を「批判的に」読む姿勢を形成し，やがて「近代的な」理性，批判的精神をもった思考とそれに基づく自己形成を模索する人間を生み出すという論を展開している。これに対して，山田俊治は前田の論を評価しつつも，前田の主張する音読から黙読への変化は，急速な勢いで，一様に起こったものではなく，その根底には階層性という問題があるため，音読から黙読への「形態の」変化を単線的に成立させると，数多くの例外を抱え込むことになると批判した[5]。つまり山田は，印刷技術，リテラシーの向上などと連動して，音読から黙読への移行が階層，性別を問わず，同時期に，一様に起こったものとすると，多くの矛盾が生じることを指摘したのである。そして山田はシャルチエの論を支持しつつ，「音読から黙読への移行は非常に長い時間を要した一個の歴史的な過程として理解」した方がよく，それは「徐々に音読が駆逐されて，黙読が優位する享受形態へと移行する階層的な歴史的過程であったかもしれない」という見解を示している（傍点部筆者）[6]。明治維新前後は音読，黙読いずれの形態にせよ「読む」に十分なリテラシーを持つものは極めて限られており[7]，小学校への就学率が90%を超えるのは日露戦争期の1904年（明治37）であることを考慮するならば，「読む」という行為を通した人々の自己形成のあり方を考察する上で，読む人間の階層性は読みの形態変化とともに論じられなければならない。明治維新以降の幅広い階層への「読む」行為そのものの定着の過程を「新聞」の読者層という視点から論じたものとして，山本武利の研究が挙げられる[8]。書籍よりも安価でより入手しやすい新聞に焦点をあて，さらに多種多様の新聞の内容を比較検討することで，異なる階層がどのように，どのような場所で，どのようなことばで書かれた文章を読んでいたのかという問題が明らかにされている。山本の論は，どのような新聞が，どのような階層に向けて発信されていったのかという論の展開を通して，間接的にではあるものの新聞を読んだひとびとがその内容ををどのように受容し自己形成の一助としていたかについての示唆をあたえるものといえよう。さらに「読書」という行為が日常的な営みとして比較的早くに成立した旧制高校生を対象として，読書を通じた「人格形成」，「教養」と言う関心から「読む」行為を論じたものとして，筒井清忠[9]，渡辺かよ子[10]の研究が挙げられる。前者は「教養」概念の成立を，日本において伝統的に存在していた「修養」概念との関連性を視野に入れ，その受容の仕方を旧制高校生を対象とした書籍，雑誌類の読書調査を基に分析している。後者は1930年代の大正教養主義期における「教養」「修養」という思想の連関と分離を，旧制高校生が愛読した書籍の内容から分析するものである。両者ともに，「読む」行為と読む人間の自己形成，さらには思想形成との関わりを論じたものと言えるが，対象が読書の習慣が定着し，これを行うことが日常的となっている旧制高校生を中心に

述べられているため，同時代の他の階層との関連性が見えにくいものとなっている。従って以下では，先行研究踏まえつつ，「読む」という行為を成立させる形態，対象，人間という三要素の関わりとその変遷を網羅的に検討することで，「読む」という行為がさまざまな階層のひとびとの自己形成にどのような影響を与えたかを考察する。

## 1. 明治維新前の「読み」—読みの形態と読書，知識形成のあり方—

そもそもものを「読む」という行為はどのようなものであり，如何なる歴史的変遷をたどっているのだろうか。「音読」と「黙読」という二つのことばが示す通り，「読む」行為は二種に大別され，前者の歴史が後者のそれよりも圧倒的に長いことは洋の東西を問わない。換言すれば黙読という行為は，活版印刷技術の改良により大量印刷が可能となり，書物を入手することが容易な状況が生まれること，ひとりでの読書を可能にする識字率の向上，そして黙読を要求する書籍の内容や図書館に代表される読む空間の誕生などの条件の上に成り立つ，近代化の一つの産物なのである[11]。

それでは，黙読が普及する以前の音読という読みの形態に基づく読書はどのようなものであり，そしてそれは日本人の知識形成，自己形成にどのような影響を及ぼすものであったのだろうか。長い間日本人の知識形成は儒学を根本とする漢籍，漢学の学習を通じて行われ，この学習は人格形成の役割をも担うものであった。特に「素読」は学習の入門期に実施されていた方式であり，藩校であっても寺子屋であっても初学者が必ず経験するものであった[12]。素読は四書五経，論語などの入門的教材を，学習者が指導者の下で教材を音読して暗誦するというものである。この過程では教材の意味そのものの理解よりも，まず教材そのものを記憶し，身体化することが求められた[13]。藩校における素読に焦点をあてると，山本は幕末から明治維新前後にかけて存在した，あるいはこの時代に教育を受けた「知識人」の多くは，この素読に始まる漢籍の学習を基本とする知識形成をした「伝統的知識人」であるとし，彼らが維新後の新聞を普及させた読者層を形成する有力な存在であったと位置づけている[14]。前田は植木枝盛や，幸田露伴らの著名な明治啓蒙期知識人の「素読」に関する自伝，伝記類を整理し，素読という訓練を経て青年たちはほぼ同質の文章感覚と思考形式を培養され，彼らは出身地や支配階層の中における階層の違いを超えて，エリートとしての連帯感情を形成することが可能であったとしている[15]。これらの分析を通して言えることは，素読という一種の「音読」という読みの形態に基づく学習方式は，知識のみならず「素読」を十分に身体化し得た人間に共通の思考を形成する働きをも有していたということである。換言すれば，素読という読み形態を基調とする学習方式，知識形成のありかたは，「音読」することによって「伝統的知識人」相互のつながりを可視的なものとし，さらに感情レベルでの連帯感をも生み出させるものであったと言えよう。そして，この素読を基調とする学習方式は漢学だけのものではなく，医学や，洋学，維新後の英学の学習にも適用されている例もある[16]。素読という「読み」に基づく知識形成のあり方は，維新後もその影響力を失うものではなく，新たな学問の学習方式として生き続けていたと言えよう。素読という「読み」の形態を，江戸から近代日本にかけての「知」の形成の問題としてとらえる中村春作は，「素読」という読みの形態が江戸の昌平坂学問所にとどまらず各地の知識人層に普及してしていたことによって，そのなかに近代を予想させる均質な「知」が形成されていくことになったのではないか，という見解を示している[17]。中村正直や植木枝盛らに代表される明治啓蒙知識人が漢学の素養を有し，これを基盤として西欧諸国の「近代的」な学問，思想を学び，これを広く日本のひとびとに紹介し「啓蒙」活動を展開したことは，維新前から存在した，素読という「読み」の形態を基盤とする知識形成のあり方が，「近代」のそれと何ら矛盾することなく，むしろ連続的なものとして機能したことの証左である[18]。つまり「素読」という音読の一形態は，漢学にとどまらぬ知識形成の方式として成立し，機能していたがゆえに，維新前には存在しなかった新たな学問知識，思想をも取り込み得るものだったのである。特にスマイルズの『西国立志編』やフランクリンの自伝を読み，立身出世を志して伝統社会を脱し，大都会に向かう青年は，書物との出会いを契機として彼等の親たちとは全く異なる新しい生き方や価値観を模索していくことになる。前田は幕末期に禄を失った士族の父親が『学問のすすめ』を息子に読ませた話を紹介しているが，『学問のすすめ』は，漢学を基調とした知識，人格形成という共通項を持つ「父」の世代と「子」の世代が共感できるものであったと考えられる。その一方，スマイルズの『西国立志編』は「子」の世代，つまり「立志」の志を抱いた青年たちには熱烈な考えを持って受け入れられたけれども，「父」の世代には受け入れられなかった。松沢弘陽は，中村正直がスマイルズの著書を翻訳するに際して西国の強（さ

らに富）の源を民主的な政治に，さらに人民の「自主ノ権」，「品行」に，そしてそうしたエートスの究極の源泉を「天道ヲ信」じ「敬」する教法，―キリスト教―に求めていたが，この教法の摂取が果たして日本固有のそれと矛盾しないかという「疑問」を引き出すとしている[19]。そして，松沢は中村正直が「薫陶益受ク」と感謝していた安井息軒が儒者としてキリスト教の思想的影響力の増大に危機を感じて『弁妄』を著し，当時日本に受容されたキリスト教の論理の弱点を鋭く的確に衝いた例を挙げ，西洋の「自由之権」や「教法」の受容が，旧体制のもとで儒教によって人格を形成した世代に，どれだけ反発を引き起こしたかが伺われるとした[20]。このことは，漢学を基調とする知識，人格形成のあり方を共有しながらも，「父」の世代には受け入れ難い価値観，思想がその書物のなかに記されていたことを示すものである。そして，「敬宇における儒教は，幕藩体制における正統教学としてのそれの，ほとんど自己否定といっているところまで変身することによって新しい社会にかなりの程度まで適応することができた」と松沢は評価するが，この「変身」が実際に可能であったのは，「父」の世代ではなく，その「子」の世代，青年たちであったのではないだろうか。スマイルズの著書に示された自己形成のあり方は「父」に代表される年長者や既存の規範に縛られぬ，正に「近代的」なものであり，そのことが記された書物は決して「音読」という読みの形態を通して，「父」の世代と共有されるものではなかった。従来ならば，「素読」を通して年齢，出身階層を超えた思想や価値観の共有が保障されていた。しかしながら，ここにおいて「素読」という音読の形態によって形成された価値観のみでは理解されない書物，すなはち青年たちが新しい価値観や思想と対峙し，受容するべく「黙読」する書物が誕生したと考えられるのである[21]。

その一方，維新前における「伝統的知識人」の範疇外のひとびとも寺子屋で「素読」を学習する機会があったとはいえ，その位置づけは藩校におけるそれとは大きな格差があった。石川謙は藩校と寺子屋の教科内容が時代と共に相互に接近してきた経緯を示しつつも，寺子屋においては一般に読み書きが重視され，寺子屋における「素読」は「大学」や「論語」が精々で，藩校に学ぶ人々のようにその講釈まで進んだものは微々たるものであったと指摘している[22]。また，高井浩も，庶民を対象とした寺子屋の教科書および学習過程を分析し，『四書』は弟子のもつ素質と才能，生活環境に応じて課せられたものであったとしている[23]。このことからも，寺子屋における「素読」は学習の「入門」以上の意味を持つものではなく，藩校における素読のように他の学習との連続性や関連性は希薄なものであったといえよう。伝統的知識人とそれ以外の階層の人々における「素読」の位置づけの格差は，維新後の「読む」行為，新しい価値観や思想の受容における階層差へと受け継がれていくことになる。これらの階層の人々における素読以外の「読む」行為も，知識人のそれと比較すると極めて限られたものであると考えられる。もちろん，滑稽本や洒落本の流行，さらにこれを供給する貸し本屋の存在は知識人以外のひとびとの間でも「読む」行為がなされていたことを端的に示すものではあるが，その機会に恵まれたのはごく一部の豪農，豪商，都市部の町人であっただろう。そもそも「読む」ためのリテラシーを有する人間そのものの割合が知識人階層とは比較にならないほど少なかったのである。知識人階層以外の読書形態は，家中での音読や拾い読み，読み聞かせなど「協同的」なものが主流であったことを前田は指摘している[24]。印刷技術の未発達により書物そのものが極めて貴重な存在であったため，一人が一冊の本を独占的に所有するのではなく，家族共有のものとして存在していたのである。その結果，一冊の本を家族の団欒の場で，リテラシーのあるもの－その大部分は父である－が家中のものに読み聞かせるという読書形態が一般的なものであった。山川均は「なにか特別の家でもない限り，どこの家庭にも蔵書というほどのものはなく（中略），懇意な家に『八犬伝』があったので，一と冬『八犬伝』を借りて来て，毎晩父が面白く読んでくれるのを，母は針仕事を，姉は編み物をしながら，家内中で聞いたことがあった[25]」と述べているし，新渡戸稲造も「僕がまだ子どもの時であった。五才頃と思ふ。父は毎夜炉辺で家族一同と盛岡名産の饅頭を食ひながら，読書をして居たことを朧げながら記憶している。母は傍らに針仕事をしながら座し，兄や姉も謹聴してゐた。（中略）父は一同に八犬傳を読んで聞かせた[26]」と回想している。つまり書物そのものが貴重であり，しかも読書に耐え得るリテラシーのあるものが少なかったこともあって，人びとの間では，音読による協同的な読書形式，あるいはその享受が一般的なものとして存在していたのである。このように，江戸から明治維新前後にかけて，「音読」が読みの形態としては階層間を問わず一般的なものであったこと，さらに女性が「読む」という行為から疎外されていたことが伺える。つまり，「音読」という読みの形態に依る原因は階層，性別によって大きく異なるものであった。伝統的知識人階層における音読は「素読」に代

表される，漢学に基づく知識，教養，文化形成の現われとしての「音読」であり，知識人階層以外の人間の「音読」は主に書物が貴重な存在であり，本を個人的に所有することがが困難であったこと，さらに読書するに十分なリテラシーを有するものが少なかったことに起因している。このことは「音読」という読みの形態を生み出す原因には階層差，性別などの問題が根底にあり，維新以後の「読み」に関する階層性や性差の問題を示唆するものとも言えよう。

## 2. 明治維新後の「読み」—新聞の普及と「読み」の習慣の確立—

明治維新前後に活版印刷技術が導入されたことによって大量印刷が可能となり，読みの形態の変化に多大な影響を与えている。このことは明治10年代に始まる新聞の興隆に反映されるだろう。そしてリテラシーの向上と相俟って新聞が徐々に普及して行くことによって，維新前の「伝統的知識人」とその子の世代のみにとどまらず，より多くのひとびとに「読む」習慣を成立させることとなったのである[27]。1881年（明治14）の時点で新聞雑誌の出版総数は253であったのが，1887年（明治20）には597となり，10年にも満たない期間で約2倍の増加を示している。もちろん，新聞は当初から多くの人々に受容された訳ではない。欧州視察の結果，新聞の「上意下達」の役割に注目した政府は，新聞を人々の間に定着させるべく，県の訓導や教員などを招いて，新聞の内容を人々に分かり易く解説する新聞解話会を各地で催した[28]。この会は法令を民衆の間に徹底させることを目的に，開化政策の一環と位置づけられ，当時多くの機能を持ち，多数の人々が集合する場であった小学校を拠点として行われたものである。この場において小学校教員は新聞を介した政府の政策の「伝達者」としての役割を担い，生徒のみならず村の有識者をも対象として新聞の「講説」を行うことを求められたのであった[29]。総じてリテラシーが低く，自力で新聞を読むことの出来るものが少数であったため，新聞を人々に「読み聞かせ」，さらにその内容を分かり易く解説するには小学校の教員が適切であったのである。

もちろん新聞の普及を図ったのは政府ばかりでなく，新聞を発行する新聞社においても同様であった。民衆の啓蒙を目的として，解話会を催し，新聞の効用を説き，これを読むことを政府が奨励したものの，新聞の読者層は豪農，官吏，教員などの「知識人層」に限定されていた。奥泉和久は当時の新聞購読に関する調査を整理し，新聞購読者は当時全国平均で1万人中40人前後であったこと，当時の新聞の購読料が高かったという理由もあって，新聞の読者は新聞を購読し得る経済力を持った豪農や職場で購読される新聞に接する機会に恵まれた官吏や教員に限定されたのだとしている[30]。もちろん，解話会が催されたことにも象徴されるように，人々のリテラシーは総じて低く，新聞を読むことが困難なものが大多数であったことも新聞読者層が限定されていた一因である。そのような状況下で新聞社は売り上げ向上を図るため，新聞を閲覧できる新聞縦覧所を各地に設け，人々に新聞の存在を認知させることを目指したのである。例えば，ミルクホールなどの人々が集まる場所に縦覧所を設置し，簡単な茶菓を提供したり，勧業博覧会会場に「休憩所」兼新聞縦覧所を設け，その優待券を新聞につけたことなどは，その目論見の最たるものと言えよう。このような政府と新聞社双方の動きが徐々に，人々の間に新聞の存在を認知させることになったのである。

解話会では小学校教員に代表されるリテラシーのあるものが，新聞を読み，その内容を人々に分かり易く解説することが本義であったが，新聞社が設置した新聞縦覧所や閲覧所に「自ら」足を運ぶ人びとは，黙々と新聞を読んでいた訳ではない。縦覧所において新聞の「朗読」が行われていたという山本の指摘[31]や，「新聞読」ということばの存在[32]は，伝統的な音読による「読み」の形態，知識吸収と理解の習慣が明治初期の人々の中に根強く残っていたことを示すものである。そして新聞を読みこなすだけのリテラシーを持つものが少なく，初期の新聞は，大多数の人々にとってはかなり難解な漢文調で書かれていたことを勘案すると，新聞を「朗読」する人間の周りにそれを聞く人々の輪ができたこと，つまり自然発生的に「読み聞かせ」が行われていたことは想像に難くない。人々の間に長く息づいていた「音読」を基調として，新聞の内容理解を可能にする場が新聞縦覧所，閲覧所において誕生したことは，新聞がより幅広い階層の人々に認知され，普及，定着していく要因の一つとして無視できないものである。

新聞は明治10年代後半から急速にその発行部数を伸ばして行くが，この時期に大量に増加した読者層は主に「小新聞」についてであって，「大新聞」の読者が急激に増加した訳ではない[33]。明治初期に新聞は，伝統的知識人を読者層とし，漢文調で書かれた『日本』に代表される「大新聞」と，女性を含む知識人以外の層，リテラシーがそれほど高くはない層を読者層とし，ルビをつけ，戯作を音読するような話し言葉に近いことばで書かれてい

た『読売』を筆頭とする「小新聞」に大別された。しかしながら，明治30年代には両者の格差は影を潜め，より多くの読者を獲得すべく，大部分の新聞が平易な文章で綴られる傾向が見られる。「通俗的で平易な言文一致体を用いた思想の伝達は双方向的なコミュニケーションの可能性をもたらすものであると考えられる」という金子明雄の指摘[34]が示唆するように，言文一致運動を推進した山田美妙，この運動を社会改良運動の一環と位置づけた堺利彦の啓蒙活動の影響は大きい[35]。新聞に書かれていることばと話し言葉が一致し，しかもそれを音読する，あるいは聞くことによって，新聞に書かれている内容の理解が一層促進されたことは想像に難くない。家庭においては家長が家人に新聞を読み聞かせることが一般化し，それを想定した雑誌も刊行されている[36]。このような読みの形態は，明治維新前の読みの形態との連続性を保ちつつ，リテラシーのある家長のみならず，これを持たない婦女子においてもごく自然なものとして定着しつつあったと言えよう。つまり，新聞は従来から日本人に根強く残っていた音読を想定した文章で新聞を綴ったこと，さらにその普及の手段として「読み聞かせ」の場を設けたことによって，リテラシーの向上とともにその読者数，読者層を確実に拡大していくことに成功した。結果的に新聞は，毎日届けられるもの－そのなかには読者の中で人気を博す「つづきもの」の小説が書かれていることが多い－を「読む」という行為，つまり「読みの習慣性」を多くの人々に形成することに貢献したのである。伝統的知識人層以外の人々にも受け入れられた新聞小説の登場は，新聞を契機とする新興読者層の創出と読書習慣の定着を可視化するものであったと言えよう。明治末期から大正初期にかけて大新聞と小新聞の格差はなくなり，以前のように新聞によって読者の階層を明確に規定することは困難な状況が生まれた。大新聞として孤高を保ち，伝統的知識人を読者とし，漢文調で記事を綴り続けていた『日本』が1906年（明治39）に事実上の廃刊となったことは，新聞を綴る文章において階層を問わずに読めるものが大部分になっていたこと，リテラシーの向上が「読む」行為に耐え得る程度になったことを端的に示すものである。ここにおいて新聞は少なくとも記事を綴る文章に関しては，階層差を超越する可能性を持つ，一つの新しい「ことば」を生み出したのだと言えよう。以降，少なくとも新聞の中では，あらゆる階層の人々が均質なことばで，新聞記者という新たなことばの使い手を通して語られることになる。この動きは言文一致運動とも相俟って，新聞にとどまらず，印刷技術の改良に裏打ちされた雑誌ブームに乗じてあらゆる活字媒体，「読む」対象へと波及し，多くの人々を巻き込み，その「均質な」ことばにさらしていくことになった。この動きが，日清，日露戦争を経て「国民」を創出するための「国語」の統一を要求する，あるいはこの要求を議論の対象とする下地を作ったといえるのではないだろうか。

## 3. 図書館—黙読普及のための機関—

前述したように，新聞は「伝統的知識人」とその子ども世代以外のみならず，かつては有力な「読者」ではなかった人々に「読む」習慣を徐々に定着させ，彼らを新興の読者層として「読む」行為に参入させる役割を果たしていた。その一方で，人々は新聞をどのように読んでいたかといえば階層を問わず何らかの形で「音読」することが一般的であり，その傾向が長く続いたと考えられる。音読していたのは，新興読者だけではなかった。新聞を読みこなすだけのリテラシーを具えた知識人においても，「音読」の習慣は根強く生き残っていたものと考えられる。たとえば伝統的知識人階層をその読者対象とし，漢文調の文章で紙面を綴った『日本』も1906年（明治39）までは発刊していたことから，少なくともこの時期までは漢文の素養を持った人々が新聞を「音読」（朗読）していたことが想像されるのである。このように階層を問わず人々の間に根強く「音読」が存在している状況下で，「黙読」はどのように普及していったのだろうか。「伝統的知識人」の子ども世代が，立身出世を志す一つのきっかけとなったスマイルズの『西国立志編』は，彼らの親世代とは共有されない，そして「黙読」を要求する可能性を持った存在であったことは既に述べた通りである。しかしながらこの黙読を要求する『西国立志編』を当時読んだ人々は，伝統的知識人の子世代，すなはち非常に限られた層の人間であって，それ以外の人々は黙読を要求される事態にほとんど遭遇しなかったといえよう。より多くの人々に声に出さずに書物を「読む」，新たな読みの形態を知らしめ，さらにこれを要求し，習慣化するものとして図書館は重要な役割を果たした。永嶺重敏は，明治時代に一般的であった「音読」が公共空間，特に図書館において禁止されることを通じて「黙読」が「制度化」されていく過程を，図書館の利用規則の分析をもとに明らかにしている[37]。永嶺の調査に依れば，1872年（明治5）に設立された書籍館において既に音読の否定が打ち出され，以降設立されていく図書館の規模，属性にかかわらず「音読排除は見事に貫徹されて」おり，

「このことは換言すれば階層・属性・年齢の如何を問わず，あらゆる利用者に対して音読禁止令が発令されていたことを意味」しているという[38]。しかしながら，音読の習慣になじんだ多くの人々にとって図書館は「遠い」存在であったと考えられる。例えば，1902年（明治35）の新聞雑誌縦覧場についての記述は，以下のように言う。「東京に牛乳コーヒ店をかねて，新聞雑誌を縦覧せしむるところ数多けれども，或る数種の他は見るべくもあらず。上野図書館の如きも，これに対しては頗る冷淡なり。新に造らるべき博文館の図書館は，大いにこの点に注意すべしと伝へられたれど，如何あらむ。（傍点部筆者）[39]」ここでは縦覧場と図書館が対照的なものとして描写され，当時の図書館の代表格とも言える上野の図書館が「頗る冷淡」なものととらえられている。この記事は「市民娯楽の所たらしめ」，「子守見は子を背負ひながら子供は菓子を食べながら」自由に新聞雑誌を閲覧することが可能な「図書館」の設立を要求して終わるのだが，ここからも，黙読を強いる図書館になじむことが出来ない人々の姿が浮き彫りにされる。また，多くの人々が一様に黙読をする「図書館」が東京の名所として紹介されていたという永嶺の指摘[40]もこのことを裏付けるものであろう。また，図書館で「音読」が禁止されている以上，「読み聞かせ」は不可能であり，一人で文字を読むに足るリテラシーのない者にとっては，図書館は「遠い」存在であった。永嶺の論文においては，黙読が制度化された空間の例として図書館の他に学校での寄宿舎での音読禁止が挙げられているが，当時は中学校，高等学校に入学する者はごく一部であった。これらのことを考慮するならば，「黙読」の普及を図書館，学校などの「空間」を中心に考えた場合，教育機関やリテラシーの高い人々が集中する都市部から地方へ，教育歴，リテラシーの高い者から低いものへと普及していったといえる。もちろん図書館は中等，高等教育機関に附属しているものばかりではなく，1875年（明治8）に国立の東京書籍館が設立されて以降，1902年（明治35）には博文館の大橋図書館が，1908年（明治38）には東京市立図書館が相次いで設立されている。東京などの大都市のみならず，日露戦争時の国民の要求の高まりに応じて教育会や青年団が簡易図書館の設立運動を各地で展開し，実現を見たものは少なくなかった。図書館という公共性の高い施設の整備によって，黙読という読みの形態は人々の間に徐々に浸透していったと考えられる。音読と黙読の力関係が逆転し，黙読が優位となったのは，印刷技術の向上，就学率の向上に伴うリテラシーの向上によって文字文化が確立した明治30年代であると考えられている[41]。この頃になると，公共の場における音読に対して人々は従来のような寛容さがなくなり，これを白眼視する傾向が見られるようになった[42]。図書館をはじめとする公共の場での音読の禁止に耐え得るほどの総体的なリテラシーの向上は，明治30年代における「黙読」の習慣の普及，あるいは「黙読」に対する社会的認知，受容を高めるものであったといえよう。

## 4. 「読む」ための方法—読書法と「黙読のすすめ」—

前節で述べたように，図書館は黙読という読みの形態を人々の間に普及させる場としての機能を果たしていた。もちろん人々が「黙読」という読みの形態を身につけたのは，図書館のみに依るものではないだろう。図書館では黙読することを強いられたが，その強制の一方で，自発的に黙読を身につけて行く人々が存在したが故に，黙読は図書館以外の場で，すなわち黙読を強制されることの無い場においても習慣的に行われるようになったのである。この「自発的な黙読」へと人々を向かわせる原動力となったのが，明治30年代に雑誌，書籍などを賑わした「読書法」である。

明治維新以降，社会的地位の上昇に関する身分的障壁がとりはらわれ，「立身出世」や「成功」熱が青年の中で高まりをみせる。その過程で学歴は社会的上昇の手段として重要且つ必要不可欠な役割を果たすものであった。しかしながら教育制度の整備に伴い，「立身出世」の「正系」コースが中学校→高等学校→(帝国)大学→国家エリート(官界)[43]…のように定型化されるようになると，この社会的上昇の正系コースから疎外される人々が明確化する。かつての『学問のすすめ』や『西国立志編』を読んで一念発起し，都会に出て「立身出世」，「成功」することは事実上困難な時代が到来していた。1880年（明治13年）に『学問のすすめ』と『西国立志編』が小学校の教科書から除外されており，これは文部省の儒教的モラルの復活を目指した政策の影響によるものであるが，その一方で維新後の「立身出世」の第一段階が終わったことを示唆するものであるとも言えよう。換言すれば，この時期に社会的地位の上昇に成功した世代が，学歴エリートを再生産していくことになるのである。「斯く今日は高等の教育を受けんとするには，勢い学資あるものにあらずば出来ざるやうになりたるを以て，学資の欠乏を訴ふるが如き人は，早く業に就き其業を真面目に勤め，之に依て発展を期するを最も得策とす。[44]」と

いう記述からも，明治30年代には学歴による階層間の移動も固定化しつつあり，学問による立身出世，社会的上昇をいさめなければならなかった状況が伺える。ここにおいて学問はかつての「身ヲ立ツルノ財本」ではなくなり，「やれば出来る」時代は終わりを告げたのだといえよう。もちろん，それだからといって正系の立身出世コースから外れた人々が社会的地位の上昇を諦めた訳ではない。そのような人々の「立身出世」，「成功」に対する意図を汲み取り，「正系」のコースに参入する手だてを講じ，紹介するものとして登場したのが『成功』，『向上』などの雑誌である[45]。このほかにも「独学」や「苦学」，「自己教育」を銘打った書籍や雑誌記事の特集が数多く存在したことは，人々の「上昇」志向が並々ならぬものであったことを示すものであろう。しかしながら立身出世は事実上困難な時代となっていたことから，結果的にこれらの雑誌，書籍の論調は各々の分限に応じた能力の充実，進歩発達を促すものへと収束していくことになる。そして，これを可能にする有効な手段として登場したのが「読書法」であった。新渡戸稲造が1911年（明治44）に実業之日本社から出版した「予が実験せる読書法」を含む『修養』とこれに続く一連の著作は明治，大正，昭和初年にかけてベストセラーとなったものである[46]。新渡戸はこの執筆依頼を受けた理由を次のように記している。「中学を半途退学したり又は中学の教育さへも受けられなかった人々を教育し，その観念を改めさせることは今日最も必要なことと思ふ。（中略）学問を修めることの出来なかった人に学識と徳藻とを涵養させる機関がない。又一家を離れ不幸の縁に沈んで居る人を慰安する設備も欠け，不幸の人は愈々不幸に陥るのみである。明治の聖世，万物の整備して居る今日，この欠点あるは僕の甚だ遺憾とする所である。」そして，「学問のない人に学問を与え，煩悶している者に精神的慰安を与える」ためにこの本を著したのだとする[47]。このように正系の出世コースから外れた人々を対象とする「読書法」が存在する一方で，正系のコースにあって，これを維持しなければならない人々，すなはち学生を対象とした「読書法」も存在し，それは重要な意味を持つものであった。教育制度の充実とともに，試験，資格制度も整備され，様々な「試験」にパスすることが彼等に課された課題であり，そのためには効率的な読書による知識の吸収が不可欠であったからである。この異なる階層を包含する「読書法」を通じて，より多くの人間が「黙読」を受容することになり，結果的に黙読が人々の間に普及することに貢献したのだと考えられる。

読書法は明治30年代を主として多くの書籍，雑誌で触れられているが，これらの記述で共通するのは，「黙読」を推奨していること，濫読（多読）を戒め熟読（精読）すること，各人の興味と必要にしたがって選択的に読書すること，批評的態度を以って読書すること，「他日の用」に備えるべく，何らかの方法で，読んだものの概要が分かるように工夫しておくことであり，これらのことが常に「注意」を怠らぬことと「記憶」との関連において述べられていることが特徴的である。

まず黙読に関しては「読書の際には音読をすることは悪いです。音読するとどうも発音の方に興味を生じて意味の方を疎かにする虞れがあります，それで必ず読書は黙読を善しとする，沈黙してさうして其意義のある所を冷静に了解するやうにして行くべきであります。[48]」として，音読することによって，書かれている内容の理解が妨げられない様に注意を喚起している。また，音読は内容を理解する上での「注意」を離散させ，書物の意義を「脳髄に印象」することが困難であり，「記憶保存するに不利」なる「悪癖」であるとする見解が多い[49]。そして，「読書をして得る所多からんと欲せば，努めて音読を避け，黙読の習慣を養成せざるべからず。[50]」として黙読をすすめるのである。そして濫読（多読）に関しては，「自己の思想力を鈍くすること著し」く，濫読（多読）することによって「其頭脳には他人の思想のみが積聚され[51]」，「彼の書物も，此の書物も，半ば了解し，彼の人の説，此の人の説に付て，漠然と知る[52]」ようになり「頭脳が粗雑に流れて緻密を欠く[53]」弊害があるという。手当たり次第に多くの書物を読み漁るのではなく，熟読することで書かれている内容の理解に努め，「自己の」思想を形成していくべきだ，ということである。そして自分の興味を感じた本，必要とするものについて書かれたものを選択して読むことによって，「大変に記憶を強くし，研究の成果も頗る面白くなって来る」のであり，「批評眼を以て迎へないで唯々書籍を読んで居るといふと其著者の説に巻き込まれて仕舞ふ[54]」という忠告がなされる。さらに，書物を通して得た知識を「回復して必要に応じ得るの用意」をするべく，書物の欄外に書き入れをしたり，目録カードを作成することなどが提案されている。それでは，これらの微に入り細に穿った読書法は何を意味するのだろうか。これは黙読を前提とする「読書」が，「注意」や「記憶」との関係と共に述べられていることと関連があると考えられる。かつての「素読」による読書，学習システムにおいては，テクストそのものを記憶することが予め組み込まれていた。書物の第一ページ目をば

らりとひらいただけで，後はテクストを見ることなくテクストそのものを再生できる「素読」は，内容理解はさて置き，テクストの「記憶」に関して心配する必要はなかったのである。しかしながら，黙読にはテクストそのものを「記憶する」段階は基本的に含まれておらず，むしろ内容を理解しつつ読むことに重点が置かれていた。その一方，読書によって得た知識を「記憶」し，「他日の用」に備えることが，近代化しつつあった日本においては不可欠であった。そして恐らく「記憶」の段階が含まれていない黙読という「読み」の行為に対する不安が，「注意」や「集中力」の喚起，精読や復読，読んだ本の内容を後に思い出すための数々の記憶法の提案に反映され，黙読による読書と併置して述べられるに至ったのではないだろうか。本の内容を丸暗記することの弊害を述べる一方で，以下のような記述が見られる。「精読の欠乏と云ふことは，今日学ぶべき物が多くなって来たことの結果であるだらうと思はれるが，此の点に於ては，昔の学者達は余程優って居ったものであると思ふ，昔の学者は同じ書物を数十回も読み，殆ど暗誦出来る位に精読したものである（傍点部筆者）[55]。」明治30年代に「読書法」を青年たちに示した井上哲次郎らは，素読による読書，学習を経験し，黙読による読書にも触れた世代であると考えられる。だからこそ，黙読ではテクストの記憶が自動的にはなされないことに不安を抱き，「注意」や「集中力」の喚起を促したのではないだろうか。いずれにせよ，「正系」の立身出世コースにある人，あるいはこれを目指す人間，成功をもくろむ人間にとって，「正しい」読書の仕方，読書によって得た知識の記憶，後々への応用のあり方を具体的に示した読書法は極めて重要な意味を持つものであった。そして立身出世の正系コースにある人間，正系コースに居ない人間双方に「黙読」という読みの形態が普及し，読みの形態を共有することは，「読む」行為に従事する人間の階層差を見えにくいものとし，さらに階層差から生じる不満や疎外感を解消する働きを持つものであったと考えられる。つまり社会の中に存在した「階層差」は，「読む」行為に従事し，しかもその形態を共有することによって正系コースにある者への同化意識へとすりかえられるのである。このような意識の創出は，正系コースから疎外された人々に対して積極的に行われた。「独学」を論ずる本では，読書を代表とする学校以外の「自己教育」の重要性は，学校教育が「偉人」を生み出すのに最低限の影響力しか持たぬことを強調することによって論じられ，そのような偉人のエピソードを列挙しつつ，学校教育に依らず「自己教育」することの有用性を述べることで，学校教育から疎外された人間，つまり当時の立身出世の正系コースから外れた人々を正当化するという構図が描かれていたのである[56]。

このように「読書法」の読者層の間には埋め難い溝があるものの，いずれの階層を対象とする読書法においても，読む対象となる本を自ら選択すること，そしてこれを「批評的な態度を以って」読むことが奨励された。かつてのように，与えられたテクストを，全面的に正しいものとして身体化していくことが当然であった享受的な読書は，「読む」行為に関して常にこの行為を行う「自己」を問う選択的な読書へと変質していく。このような読書を通じて，青年たちの思考が個人化，内省化していくのは当然の成り行きとも言えるだろう。自らの生き方を，自らの手で切り拓き，構築していく方向性を青年たちに示したのは，親や既存の価値観ではなく，「読む」という行為を通じた新たな思想や価値観との出会いであり，その受容であった。そしてこの「読む」行為を根本から支え，人々の間に自らの思想を形成する原動力となる一方で，立身出世の正系コースから疎外された人々の不満を解消する役割を担っていたのが「読書法」という「黙読のすすめ」なのである。

## 5. 「読む」人間の拡大と「読み」の対象

1872年（明治5）の学制の発布以降，教育制度の整備が進むとともに，就学の機会は，男子と比較とすると格段に少なかった女子も含めて拡大した。それに伴い，リテラシーも総体的に向上して明治20年代に始まる雑誌ブーム，「日清戦争を境として増す，マス・コミュニケーションの送り手と受け手の変化[57]」は，商工業読者層，軍人，これらの家族からなる家庭読者層，さらにはそれほど多くはないと考えられるものの下層読者層など多様な読者層を参入させていた[58]。平田由美によれば，『女学新誌』を皮切りに女性をターゲットとする雑誌は短期間の内に驚異的な発行部数の増加を見せ，この動向は大正期になっても続き，第一次大戦の好景気がもたらした新中間層の拡大と相俟って，女性読者を消費者として無視できぬ地位にまで押し上げたのである[59]。階層や性別を問わない一定程度のリテラシー向上，新聞雑誌の興隆，「読む」行為が定着し，読む人間が拡大していく一方で，「読む」人間の階層間の分離は進行していたと言える。明治30年代の『帝国文学』は多種多様なジャンルの小説やその内容に関する論議が盛んであり，「小説の読者の範囲は極めて廣し。上は高貴縉紳より，官吏，商人，医師，

学者，車夫，別当，芸者，娼妓の輩に至る迄，苟も目に一丁字を解する程のものは，何れも此内に含まれざるはなし。[60]」という記述からも小説を読むという行為が多くの人々に浸透しつつあった状況が伺われる。さらに記事は以下のように続く。「夫れ読者の種類は此の如く多様なり。(中略) 彼等が趣味は列挙すること能はず。然りと雖，教育ある読者と，教育なき読者とは，嗜好趣味の上に於て，自ら其間に逕庭あるを免れず。教育ある読者は，小説に対して多少の批評眼を有す。(中略) 之に反して，教育無き読者にありては，批評眼を有するものは極めて稀なり。彼等が小説を読むは，ただ快を求め，興を買はむが為めのみ。」さらに『帝国文学』の記者は，当時社会問題となっていた「小説の悪影響」とそれへの対応策としての小説を読むことの規制を次のように批判する。「現時の小説中，少なくとも一部の読者の心を動かして，罪悪の方向に誘ひ，痴情の方面に導くの力あるもの果たして之れ有りとせむか，所謂此一部の読者なるものは，無教育なる読者の範囲に属すべきものにあらずや。苟しくも多少の教育を有し，倫理，道徳の何物たるを解せるの徒が，いかでか，小説の為に感化せられて，罪悪を犯し，痴情に陥るものならむや。強いて小説を禁ずるの範囲に定めむと欲せば，先ず無教育の読者より禁ぜざるべからず。[61]」ここで特徴的なのは，読者が「教育ある読者」と「教育無き読者」とに分類されていること，そしてかれらが同じ「小説」を読むにせよ，その「読む」ことに対する態度が対照的であり，結果として「読む」行為から引き出されるもの－ここでは主に道徳的な問題であるが－にも影響すると考えられていたことである。つまりここでは小説を読むことそのものではなく，小説を誰が読むのか，ということが重要な問題となっているのである。「人類の最劣等の欲望を描く小説は，中等以下の読者の情欲を扇動して，模倣の念を起こさしむる事なしとせず。[62] (傍点部筆者)」の記事にも見られるように，小説の内容そのものの批判にとどまらず，それを読む人間の階層との関連性をもって「不健全な」小説を糾弾するのが当時の一般的な論調であり，それだけに読む人間の「読む」行為に関する分離は一層明確なものとなり，これが読む対象や読みの形態にも波及したと考えられる。

明治初期の「大新聞」と「小新聞」においては，読む対象から読む人間をほぼ一義的に想定すること，そしてその逆もまた可能であり，しかもその読む人間は維新前の身分制を色濃く反映するものであったが，明治中期から後期にかけてはこの対応関係が極めて複雑化していたことが伺える。それは教育制度の整備の結果，階層がかつての身分制によってのみ規定されるのではなく学歴によって規定されるようになっていたこと，そして「読む」行為に関して言えば，「何を読むか」ということのみならず「誰が，何をどのように読むのか」が問題になったことを示している。換言すれば，同じ物を読むにしても「誰が」読むかによってその行為の意味するところは全く異なったものとなる可能性を持っていたといえよう。教育程度を基本とする階層や，家庭や学生など社会的カテゴリーによって類型化された読者グループに対応する作品を書くという動きがもっとも顕著な形であらわれたのは，「家庭小説」や『少年世界』(1895年・明治28) の発刊である。このことは，音読から黙読へと読みの形態が移行し，「読み」が個別化する一方で，「読む」行為が階層ごとに組織化されていったことを意味するものである。ただし，この動きは，かつてのように「読み」の形態や行為そのものが階層によって分離していたというよりも，特定の階層を対象とする「読み」の対象が文学の一ジャンルとして誕生し，これによって読者が組織化されていったことを意味するものといえよう。換言すれば，このような文学のジャンルに対応する階層，中産階級が成立したのである。

家庭小説や『少年世界』に代表される少年文学というジャンルが成立した背景には，日清戦争直後に流行した深刻小説，悲惨小説の流行と，これを批判する動きである。この動きは『帝国文学』においても顕著であり，小説の増加とそれに伴う「不健全な」小説を憂うる論が紙面を賑わしている。これらの深刻小説や悲惨小説の流行，新聞雑誌上の小説に対する教育関係者からの数々の批判は，学生のみならず年少の者や，善悪の判断が明瞭でない「中等以下の者」が小説を読むことは，人間を堕落させるものとして，小説およびこれ読む行為を否定的に捉えるものであった。巌谷小波は『教育時論』誌上において，「危険だからといって川遊びを止めさせるよりは，水泳を教えて，水に溺れしめぬ方が得策ではあるまいか。」「実にかふいふひとには，予め健全な小説を読ませて置く方が善い，血清治療法と同一の効果を奏して大いに功徳ある人になるのである。[63]」として，小説を「教育的」メディアとして利用することを提言している。その意味において明治30年代に流行した家庭小説は，「中等以上」の家庭に持ち込むことが可能であり，しかも健全な家族の育成や，家族の団欒などの教育的メディアとしてふさわしいものであった。事実，『家庭雑誌』を刊行し，『家庭の新風味』を著した堺利彦は，「中等社会」の人々を読者対象とし，ここから社会改良の運動が広がっ

ていくという見解を示しているし，『少年世界』の読者たちは「苦学するものを対象化できる，物質的にも，精神的にも余裕のある少年たち」であったとされている[64]。「家庭小説とは，一家団欒の和楽，棠様韓々の快観水入らずの間に成立つ渾然たる愛の叙事詩なり。我が輩の敢て之を薦むる所以は一方愛の反面を発揮し，他方社会改良の一助とならむことを信ずればなり。[65]」，少年文学に関する「余輩は其物語の無邪気にして無害なる点は確かに之を認むるに吝ならず。然れと単に是れ消極的の用意のみ，何ぞ一歩進めて積極的に有益なる物語を作為せざる。何ぞ有益なる教誨を含蓄せしめ健全醇正なる観念を鼓舞せんことを力めざる[66]」や，少年文学を維新後の産物としてその可能性を以下のように述べる「流暢平易にして趣味多き文学化の筆によりて，少年児童の為に叙説せられつつあり。これ独り思想単純なる年少児童の，娯楽を目的とするのみに非ず，亦その心理上の発達を助成するに於て，種々の方面より其の効甚大なれはなり。[67]」という記述は，家庭小説や少年小説が「教育的」メディアとしての役割を担っていたことの証左である。

しかしながら，ここで「教育的」メディアとしての意味を持ち，その役割を果たし得るのは，読者が「中等社会」の階層の人々である場合であって，この階層以下の人々は，これらの小説を「読む」ことに参入していようとも，「疎外」されていたと考えられる。なぜなら，これら家庭小説や少年小説が，「中等社会」を構成する人間，あるいは今後その階層社会を担う少年，少女を読者層として予め想定している以上，その小説は中等社会の人々の価値観や論理で貫かれ，これ以外の階層の人々，特に中等以下の階層の人々は一方的に対象化され，疎外され，ときには断罪されていくからである。それはたとえば，少年「世界」という雑誌名にあるように，少年というカテゴリーによって構成される一つの完結した読者共同体が形成され，それによって「われわれ」という意識や，「われわれ」/「かれら」という区分が創出される一方で，「われわれ」内部での差異が雑誌を通してなされること[68]や，堺利彦は「健全なる中等社会の家庭」を社会改良の中核としたものの，その様な家庭を想定することが出来たのは一部の中産階級の人々に過ぎなかったという指摘[69]にも見ることができる。

リテラシーの向上によって，家庭小説や『少年世界』は多くの多様な読者に読まれ得るものであった。女性を中心とする多くの読者を獲得した徳富蘆花の『不如帰』は国民新聞に，菊地幽芳の『己が罪』，『乳姉妹』は大阪毎日新聞に掲載された人気新聞小説であったし，『少年世界』も「低廉」を売り物にした雑誌であった。しかしながら，「中等以上」の階層以外の人々がこれらの小説を読む時，そこに描かれているのは，彼等の境遇とはことなる階層にある人々の「家庭」像であり，「少年」像であって，これらの「あるべき」像を支える価値観や論理は彼らのそれとは異なるものであった。それ故に，これらの小説を読んだ「予め想定されていなかった読者」は，疎外されてくのである。成田龍一が引用した「少年界と博文館の少年世界とを比べてみれば」「少年世界の方は少し四角張っており」，少年界を買ったら「実に面白くて今度少年世界を読むのがいやになってしまいました」という少年の投書[70]は，この事を端的に示すものといえよう[71]。

明治30年代に流行した家庭小説は，小説に書かれた「あるべき家庭の姿」が読者の趣味を高め，小説中の道徳的思想が，一等国たるにふさわしい高尚な思想をもたらすものととらえられていた。家庭小説は健全なる家庭を育成する一家団欒の一助であり，また「父子姉妹の間に読みて，顔を赤うすべき節一もなし。[72]」とあるように，健全な思想を培う手段として，家長が家人に読み聞かせる「音読」が想定されるものであった。そして，この家庭小説における「音読」は，黙読の普及やスマイルズの著作の受容に関してみられた親と子の世代間の価値観の断絶を防ぎ，価値観を共有する目的をも併せ持っていたと考えられる。そしてこのような家庭小説を然るべき読者が読むことによって，中等家庭およびその構成員が組織化されるのである。一方，少年小説は成田が指摘するように，「黙読」される個別的な読みの対象でありつつも，これを読む中等階層の少年たちに「われわれ」意識に基づく読者共同体を創出した。つまり少年たちは個別的に小説を読みつつも，少年小説の根底にある「われわれ意識」によって組織化されていったのである。

このように，家庭小説においても，少年小説においてもその読みの形態こそ異なるにせよ，ともにこれを読む「予め想定された読者」を組織化する一方，組織化する対象，階層を明示的，あるいは非明示的に限定することによって，対象外の「読む」人々を疎外していく構図が共有されていた。しかしながらその「疎外」は，これらの小説が「家庭」や「少年」という抽象性の高い，曖昧なことばで規定されていたが故に，その排他的な性質は明示されず，結果として「疎外」の構図は見えにくいものとなっていったのである。

やがてこの「家庭」や「少年」という，一定の階層を組織化する一方で，それ以外の階層の人々を疎外する機

能を持っていたことばは,「国民」というより抽象性の高い概念で表現され，それによって人々は組織化されていくことになる。「国民」という概念によって「われわれ」や「同胞意識」を創出し，人々を組織化していくことによって，その中に存在する差異や疎外は一層複雑，深化したものとなる。そして「国民」の中に存在するさまざまな階層間の差異，差異から引き起こされる疎外，矛盾，不満は，読書法において疎外された階層にある人々がその読みの形態を同じくすることによって，不満を解消したのと同様の構図で,「国民」ということばや意識の中に解消され，収斂していくことになるのである。このようにして「読む」対象そのものは多くの人に対して開かれているにもかかわらず,「誰が」読むかによってその意味は全く異なったものとなる可能性が生まれた。「読む」行為に参入する人間が多くなる一方で，読者対象を限定した文学が成立することによって，同じものを読みながらも読む人間の階層が分離し，時として読む対象の理解から排除され，疎外されるという構図が生まれることになったのである。「家庭小説」や「少年文学」の成立は，かつてのように「読む/読まない」による読者層の分離のみならず,「読む」読者層の中での複雑化した分離を示唆するものである。

## おわりに

明治維新以後,「読む」という行為は新聞の普及，就学機会の拡大によるリテラシーの向上などと相俟って，維新前には読者層として想定されていなかった階層の人々をも取り込みつつ，人々の間に習慣化されていった。そして「読む」行為が音読から黙読へと緩やかに変遷していく過程を辿ることで明らかにされたのは，外面的には同一の形態を示しながらも，その形態の成立には「読む」行為に関わる人間の階層差が深く関わっているということである。素読に基づく音読，リテラシーの低さに起因する読み聞かせや拾い読みをも含む音読の習慣は，人々の間に根強く残っていたものの，リテラシーの向上や黙読を強制する場としての図書館の普及は，次第に人々の間に黙読する習慣を形成，あるいは認知させていくことになった。特に明治30年代に盛んに紹介された「読書法」は立身出世の正系コースにある人，さらにこのコースから外れてしまった人の上昇志向を汲み取りながら，読書による知識の吸収，形成の具体的な方法を示し，より多くの人々に黙読を普及させる役割を果たしたと考えられる。この「黙読のすすめ」であるところの読書法において，読者は常に自己の判断に基づいて書物を選択し，注意してこれを読むことで自己に必要な知識を吸収，記憶することを求められた。かつてのように，必要とされる一定の知識の吸収が保障される享受的な読書から選択的，主体的な読書へと移行することで，人々は常に読む行為に従事する「自己」という存在を問われることになったのである。

「読む」行為に参入する人間が拡大し，彼等に大量の印刷物が提供される一方で，読む人間の分離を進行させ，分離した読者層に適した読みの対象が，何らかの意図を以って提供されることになる。ここにおいて，読む人間と対象との対応関係は複雑化し，誰が何を読むかが重要な問題となり，同一の書物を誰が読むかによって，読むという行為そのものの意味は全く異なったものとなるのである。読むという行為の問題が「読む/読まない」で類型化される時代は終わりを告げ，明治30年代からは読むという行為の中での分離が始まったと考えられる。それは,「読書法」の読者層が正系の出世コースにある人々のみならず，そのコースから外れていたり，途中で断念した人々によって構成されていたことに端的にあらわれている。両者は共に「読書法」を読んでいた。しかしながらかれらの「読む」行為の意味は全く異なったものである。前者は現在の地位の維持，あるいはそれ以上の地位への上昇の可能性を持つ者であるが，後者にその可能性はほとんど無いのである。必然的に正系の出世コースから疎外された人々にとっての読書法は，正系コースにあるものにおける「社会的地位の上昇の手段」としてではなく，現在の地位をどれだけ「充実」させるかという問題へと変換されていくこととなった。読書による修養の方法を論じる「修養書ブーム」は，この動きを象徴するものであると言えよう。しかしながらこの「読書法」の根底にある階層間の分離は，個人的な「黙読」という，共通した読みの形態で「読む」という行為そのものの存在によって見えにくいものとなり，一層深化したレベルで読者層の複雑な分離と疎外，思想の断絶を生み出すことになるのである。

この動きに比例して,「読む」行為を通じた思想の形成も極めて複雑な分離の様相を示していたことは想像に難くない。特に，明治後期から論争の的となった「国語国字問題」は，人々が読む「ことば」がどのように形成され，どのような形で読む「対象」となったのか，そしてそれは誰によって，どのように読まれ，思想形成の糧として享受されたのかという問題に関して重要な示唆を与えるものだろう。特に明治後期以降，多種多様な雑誌が様々な階層の女性を読者層として取り込んでいったこと

に焦点をあて，これを分析することは，「読む」行為における階層差と性差が思想を含む自己形成にどのような影響を与えるものであったかという問題を解明し，この歴史的意味を考察することに貢献するだろう。今後の課題としたい。

## 【註】

1 例えば，青野季吉「女性の文学的要求」1925年（大正14），『転換期の文学』1927年（昭和2）所収，片上伸『文学評論』1925年，『転換期の文学』所収，大宅壮一「文壇ギルドの解体期」『新潮』，1926年。

2 『思想の科学』の1946年2号，8号，1947年5号では「大衆」文学や文芸を取り上げ，戦前期における大衆の思想形成を分析する論が展開されている。

3 鶴見俊輔『思想の科学　趣旨と行動』思想の科学社，1952年。

4 前田愛『近代読者の成立』有精堂，1973年。

5 山田俊治「音読と黙読の階層性—前田愛「音読から黙読へ—近代読者の成立」をめぐって」『立教大学日本文学』第77巻，1996年，p. 55-57.

6 山田，前掲論文，p. 57.

7 清川郁子は，「「壮丁教育調査」にみられる義務制就学の普及」の中で近代日本のマス・リテラシーの水準と義務制就学普及の数量的推移を検討し，明治前期においては一部の地域，あるいは階級・階層を除いてマス・リテラシーの水準は一般に言われているように決して高いとは言えず，その水準の高さは基本的には近代以降の公教育の急速な成立によるものであって，マス・リテラシーの水準の高さが公教育の成立に先行してたとは言えないという見解を示している。清川郁子「「壮丁教育調査」に見る義務制就学の普及—近代日本におけるリテラシーと公教育制度の成立—」『教育社会学研究』第51集，1992年，p. 111-135.

8 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局，1981年。

9 筒井清忠『日本型「教養」の運命—歴史社会学的考察—』岩波書店，1990年。

10 渡辺かよ子『近代日本の教養論—1930年代の教養論を中心に—』行路社，1997年。

11 ヨーロッパにおいてピューリタンたちが聖書をひとりで読むことから黙読が普及したといわれるが，家庭やサロンなどで音読をする習慣も長く併存していた。

12 素読をはじめとして，江戸期の学習方式に関してまとまった考察が石川謙『学校の発達』に見られる。

13 古田東朔は「江戸期の学習方式」においての素読の具体的な学習方式とそれに続く学習方式の関連について論じている。古田によれば，素読によって教材の内容を記憶した後，学習者を中心として相互的に書物を読み合い，誤りを訂正し合う「輪読」，最終的に教材についての解釈や討論を目的とした「輪講」へと移行して行くという。古田東朔「江戸期の学習方式」『日本育英会研究紀要』第2集，1964年，p. 1-26.

14 山本，前掲書。

15 前田，前掲書。

16 古田，前掲書。ここでは明治4年(1871)の岸和田藩校において英語の学習が素読，会読（解読）輪講の順で行われていたことが示されている。

17 中村春作「〈素読〉という習慣」『古田敬一教授頌寿記念中國学論集』，汲古書院，1997年，p. 677-696. また橋本昭彦は，「江戸幕府素読吟味の実態とその性格」において，江戸幕府で行われていた素読吟味を起点として官製の学習階梯が形成され，幕臣が学ぶべき内容，程度の標準が画定されたことを示している。橋本昭彦「江戸幕府素読吟味の実態とその性格」『国立教育研究所研究集録』第22号，1999年，p. 21-33.

18 松本三之介は『明治思想における伝統と近代』（岩波書店，1996年）において，ルソーの『社会契約論』を翻訳した中江兆民における漢学を基調とする知識形成のあり方と，西欧の思想，学問の受容の連続性を指摘している。

19 松沢弘陽「『西国立志編』と『自由の理』の世界—幕末儒学・ビクトリア朝急進主義・「文明開化」—」『日本政治学会年報』，1975年，p. 9-52.

20 松沢，前掲論文。

21 もっとも，「子」の世代とその子の世代，つまり「孫」の世代は，黙読という読みの形態を共にするものの，価値観までも共通ものであったとは考え難い。1895年（明治28）の「漢文の素養」（『帝国文学』）においては「漢文の妙味を閑却せんとするが如きは，真に国文の発達を図らむとする文士の所為にあらず」という批判があり，さらに1906年（明治39）の「中学生の漢字の智識」（『教育学術界』）は中学生の漢字に関する知識の低下を嘆くものであり，「漢学」の素養が知識形成の過程から失われつつあることに関する「子」の世代の「孫」に対する不安があらわれている。これらのことからも「子」の世代と「孫」の世代との間にも何らかの価値観の差異が生まれていたことが推測されるが，それは今後の課題としたい。

22 石川謙『日本庶民教育史』玉川大学出版部，1972年，p. 315.

23 高井浩『天保期，少年少女の教養形成過程の研究』河出書房新社，1991年，p. 114.「天保期のある少年と少女の教養形成過程の研究」『群馬大学紀要人文科学篇』第13号-23号，1964年-1973年初出。

24 前田，前掲書。

25 山川均「ある凡人の記録」『山川均全集』第15巻所収。p. 285. 勁草書房，1966年。

26 新渡戸稲造「余が実験せる読書法」『修養』明治44年，実業之日本社。近代日本青年期教育叢書・第一期　第2巻，1990年，日本図書センター所収。p. 325-326.

27 新聞の興隆とその読者層の問題に関しては山本，前掲書に詳しい。

28 新聞解話会の果たした役割に関しては奥泉和久「明治10年代前半における新聞縦覧所の設立について」『図書館史研究』，第6号，1989年，p. 1-30 に詳しい。

29 奥泉，前掲論文。p. 3.　ここで奥泉は長野県や秋田県が教員に対して新聞の「解話」を行うことを要求する布達が出されたことを指摘している。

30 奥泉，前掲論文，p. 2.

31 山本，前掲書。

32 『学生読書法』の「読方」の説には「吾伊」という音読の一形態を戒め，「吾伊とは口ドモリて読声を長く引き読むことを云ふなり，即ち吾伊の二字唐音にてはウウィィと読むなり，今日俗に新聞読と称するも是れなり，」という記述が見られる。駿台隠士『学生読書法』明治35年，大学館，p. 102.

33 奥泉，前掲論文。p. 11.

34 金子明雄「明治30年代の読者と小説—「社会小説」論争とその後—」『東京大学新聞研究所紀要』第41号，「近代日本におけるユートピア運動とジャーナリズム」第三章所収，1990年，p. 123-140.

35 言文一致運動は「読む」対象のことばを形成する問題として重要な位置を占めるものであるが，今回はその関連性を示唆するにとどめておく。

36 1903年（明治36）に堺利彦が刊行した『家庭雑誌』は「健全の思想　改革の気象　清新の趣味　親切の教訓　平易の文章　通俗の説明」を特色とする家庭のための啓蒙雑誌である。

[37] 永嶺重敏「黙読の〈制度化〉—明治の公共空間と音読慣習—」『図書館界』，第45巻第4号，1993年．p. 352-368.
[38] 永嶺，前掲論文，p. 358.
[39]「新聞雑誌展覧場」『教育学術界』，第五巻第一号，明治35年．p. 72.
[40] 永嶺，前掲論文，p. 359.
[41] 宮島達夫「黙読の一般化—言語生活史の対照—」『京都橘女子大学研究紀要』第23号，1996年，p. 1-16.
[42] 永嶺，前掲論文，p. 362-363. 1902年（明治35）に「風俗改良会」が発表した「風俗改良私案」においては，公共の場での音読が改良されるべき悪習の一つとして挙げられている。
[43] 雨田英一「近代日本の青年と「成功」・学歴—雑誌『成功』の「記者と読者」欄の世界—」『学習院大学文学部研究年報』第35巻，1988年，p. 259-321.
[44]「苦学生の衰運」『教育学術界』第十二巻第四号，明治39年8月5日，p. 96.
[45] 雨田，前掲論文。雨田は『成功』の読者層を分析し，正系の立身出世コースから外れた，あるいは何らかの事情で途中で断念せざるを得なかった人々，例えば高等小学校卒の人間が多かったことを指摘している。
[46] 藤原進『日本における庶民的自立論の形成と展開』1986年，ぺりかん社，p. 378.
[47] 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集』第七巻，教文館，1972年，p. 682.
[48]「読書法」井上哲次郎，『教育学術界』第八巻第五号，明治37年。
[49] たとえば『学生読書法』，p. 102.
[50] 久津見蕨村『立身達志 独学自修策』明治35年，三育舎．p. 158.
[51] 井上，前掲。
[52] 大瀬甚太郎「教育書を読む方法」『教育学術界』第八巻第五号，明治37年．p. 11.
[53] 新渡戸稲造『修養』実業之日本社，明治44年．p. 314.
[54] 井上，前掲。
[55] 大瀬，前掲。
[56] 久津見，前掲書。
[57] 金子，前掲論文，p. 136.
[58] 大阪府管内の壮丁普通教育程度調査によれば，1900年（明治33）に「読書算術ヲ知ラ不ル者」は大阪府平均で29.64%であったが，1912年（明治45）には19.29%となっている。その一方，「尋常小学校卒業ノ者」は1900年には21.44%であったものが45.44%に，「高等小学校卒業ノ者」も4.84%から19.39%へと増加ししている。
[59] 平田由美『女性表現の明治史—樋口一葉以前—』岩波書店，1999年．p. 43.
[60]「読者の種類」『帝国文学』第七号，明治32年。
[61] 同上。
[62]「小説と罪悪」『帝国文学』第二号，明治30年。
[63] 巌谷小波「教育と文芸の関係」『教育時論』八二三号，明治41年．p. 6.
[64] 成田龍一「『少年世界』と読書する少年たち——九〇〇年前後，都市空間のなかの共同性と差異—」『思想』第845号，1994年，p. 193-221.
[65]「家庭小説」『帝国文学』，明治30年，p. 582.
[66]「少年文学」『帝国文学』，明治31年，p. 519.
[67]「少年文学の新要素」『帝国文学』，明治32年，p. 1139.
[68] 成田，前掲論文。
[69] 篠崎恭久「明治末期社会改良論の特質—堺利彦と小河滋次郎の「家庭改良」論—」『史境』，第25号，1992年，p. 1-18.
[70] 成田，前掲論文，p. 219.
[71] 木村小舟は「少年界の出現」（『明治少年文学史』第二巻，1948年）において，「『少年界』の目ざす所は，明らかに『少年世界』を凌駕せんとする」ことにあり，その内容は「大体より見て，学問的記事を軽視し，主力を文芸娯楽の方向に」傾けるものであったとする。このことからも，『少年界』は，上級学校への進学を前提とする誌面作りをしていた『少年世界』とはその読者層を異にしていたといえる。
[72]「家庭と文学」『帝国文学』，明治29年，p. 108.